

[成果情報名]大果で食味がよい施設栽培向きビワ新品種「はるたより」

[要約]ビワ「はるたより」は「長崎早生」に「77-856」を交雑して育成した施設栽培向きの新品種である。「長崎早生」に比べ熟期はやや遅く大果となる。果肉が軟らかく糖度が高く、食味は良好である。外観良好で、日持ち性は「長崎早生」より優れる。がんしゅ病に極めて強い。

[キーワード]ビワ、新品種、大果、食味、がんしゅ病、施設栽培

[担当]長崎県農林技術開発センター・果樹研究部門・ビワ・落葉果樹研究室

[連絡先]（代表）0957-55-8740

[区分]果樹

[分類]普及

[作成年度]2012 年度

[背景・ねらい]

ビワは摘果・袋掛けや収穫・調製に労力が集中するため、経営規模の拡大のためには熟期の異なる品種を組み合わせる栽培することが望ましい。しかし、経済栽培が可能な優良品種が少ないため、各産地とも1～2品種に偏った品種構成となっている。特に、施設栽培では、早期出荷が可能な「長崎早生」に偏重しており、このことが収穫期の労力分散を妨げる要因となっている。「長崎早生」は優良な早生品種であるが、果実が小さいことや成熟期の高温によりへそ青症などの果皮障害が発生しやすいことが欠点として挙げられる。そこで、施設栽培において「長崎早生」と熟期が異なり労力分散が可能となるとともに、大果で高温果皮障害の発生が少ない優良品種の育成を図る。

[成果の内容・特徴]

1. 1988年に「長崎早生」に「77-856」を交雑して育成した品種（旧系統名：ビワ長崎14号）である（図1）。
2. 樹勢は強く、樹姿はやや開張性である。着花性は良好である（表1）。育成地における施設栽培での熟期は4月中旬頃で、「長崎早生」よりやや遅く成熟する。がんしゅ病A～Cグループ菌に抵抗性で、がんしゅ病はほとんど発生しない（表2）。
3. 果実は短楕円形で、果皮は橙黄色である（表1、写真1）。果実重は55～60gで「長崎早生」よりも大果であり、果肉も厚い。果肉は比較的軟らかく、糖度は「長崎早生」と同程度かやや高く、食味良好である。
4. 施設栽培ではそばかす症および裂果が若干発生する程度で、へそ青症、へそ黒症などの果皮障害は少なく、外観良好である（表1）。
5. 25℃で1週間貯蔵した果実の減量率は「長崎早生」より若干低く、果皮のしなびも軽微である（表2）。また、果汁は「長崎早生」よりも多く、食味も「長崎早生」よりも良好で、日持ち性は「長崎早生」よりも優れる。

[成果の活用面・留意点]

1. 平成25年2月1日に品種登録出願公表され、現在審査中である。
2. 露地栽培では寒害を受けやすいとともに果皮障害の発生が施設栽培よりも多くなるので、施設栽培が望ましい。
3. 「長崎早生」と「茂木」の中間に成熟するので、施設栽培において収穫労力の分散による経営改善が可能である。
4. 果皮は橙黄色であるが、「長崎早生」よりも橙色がやや薄いので、収穫適期を逃さないように注意する。
5. 「長崎早生」よりも樹勢が強いので、幼木時は誘引により整枝を適正に行うとともに、樹勢をコントロールする必要がある。

[具体的データ]

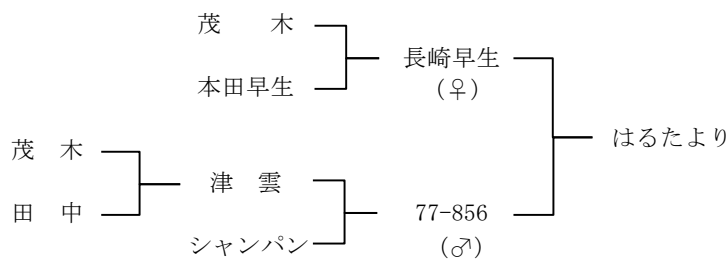


図1 「はるたより」の系統図



写真1 「はるたより」の結実状況

表1 「はるたより」の樹体および果実特性(施設栽培、2008～2010年の平均)

品種・系統	樹姿	樹勢	中心枝	熟期	果形	果皮色	果実重	果肉の厚さ	果肉硬度
			着花率 (%)						
はるたより	やや開張	強	96	4.19 (月.日)	短楕円	橙黄	56.5 (g)	9.3 (mm)	やや軟～中
長崎早生	直立	やや強	93	4.12	長卵	橙黄	44.6	8.6	中

表1 つづき

品種・系統	糖度 (%)	酸含量 (g/100ml)	食味	果皮障害					
				へそ青症	へそ黒症	そばかす症	裂果	紫斑症	緑斑症
はるたより	13.2	0.17	良	0.0	0.1	3.3	2.8	0.2	0.0
長崎早生	12.5	0.21	やや良	7.5	8.6	3.1	2.4	0.6	0.0

注) 果皮障害は各果実の発生程度を無、軽および甚のいずれかに分類し、
 $\{ (\text{軽の果数}) \times 1 + (\text{甚の果数}) \times 3 \} / (\text{調査果数} \times 3) \times 100$ として算出

表2 「はるたより」のがんしゅ病抵抗性及び日持ち性

品種	各グループに対する抵抗性			発病新梢率 (%)	日持ち性			
	A菌	B菌	C菌		減量率 (%)	しなび	果汁の多少	食味
はるたより	R	R	R	0.3	11.4	軽	中	中
長崎早生	S	S	S	6.5	13.9	甚	少	やや不良
茂木	S	S	S	5.9	—	—	—	—

注) 抵抗性は接種検定による。R: 抵抗性、S: 罹病性。発病新梢率は露地栽培で2009年調査。
 日持ち性は2010年に施設栽培の果実を25℃で1週間貯蔵後に調査。

[その他]

研究課題名: 地球温暖化に対応した高品質ビワ新品種の開発と温暖化進行後の適地変化予測
 予算区分: 国庫

研究期間: 2011～2013 年度

研究担当者: 稗圃直史、福田伸二、富永由紀子、浅田謙介、寺井理治、長門 潤、中山久之、中尾 敬、佐藤義彦、根角博久、橋本基之、石本慶一郎